

第 36 期第 2 回研究会（ネットワーク社会研究部会企画）「中国のネットワーク社会とメディア研究」終わる

日 時：2018 年 1 月 20 日（土） 13:00～16:30

会 場：成蹊サテライト・オフィス

東京都千代田区丸の内 3-1-1 国際ビル 1 階 124 区（室）

問題提起者：章 蓉（朝日新聞社）、劉 雪雁（関西大学）

討 論 者：伊藤昌亮（成蹊大学）

司 会：飯田 豊（立命館大学）

参 加 者：31 名

記録執筆：飯田 豊

日本の報道が伝える中国のインターネット事情は、共産党による言論統制、特定の事件・事故をめぐる極端な反応などに偏りがちで、中国のネットワーク社会のありようを多面的に知る機会は少ない。また、中国語圏におけるメディア研究の著しい進展についても、その詳細が日本ではほとんど知られていない。

そこで本研究会ではまず、『コレクティブ・ジャーナリズム：中国に見るネットメディアの新たな可能性』（2017 年）を刊行した章蓉会員から、中国におけるインターネットの発展状況を踏まえ、その集合知に裏打ちされた「コレクティブ・ジャーナリズム」の形成過程が説明された。章会員が定義するコレクティブ・ジャーナリズムとは、不特定多数の非専門家を中心にネット上で話題提起（アジェンダ・セッティング）がなされ、情報の収集と提供、意見交換や論評などがおこなわれる、一連の言論活動の総体のことである。かつてコレクティブ・ジャーナリズムには、支配的な言論空間に対抗する公共圏の創出、政治権力に対する一定の監視などの社会的意義が認められたが、政府による規制や商業主義の介入といった脅威に晒され、限界に直面している。それに対して、Weibo（微博）や Wechat（微信）といった比較的新しいプラットフォームでは、急速に脱政治化や娯楽化の傾向が強まり、「網紅（ワンホン）」と呼ばれるネットセレブ（Instant Online Celebrities）も登場した。ただし章会員によれば、100 万人以上の網紅は決して一枚岩ではなく、その活躍は中国社会の多元化を象徴している。したがって、その影響力が今後も非政治的な領域にとどまるかどうか、注目に値するという。

次いで、劉雪雁会員は「中国におけるメディア研究：問題意識、対象と方法」と題して、中国語圏におけるメディア研究の到達点について考察した。具体的には、(1) 伝統メディアとネットメディアの関係に関する研究、(2) 都市とメディアの関係に関する研究、(3) メディア・リテラシーに関する研究、という三つの観点から、劉会員自身の手で日本語に翻訳されている論文が多数紹介された。いずれの観点にもとづく研究も、インターネットとモバイルメディアが生活基盤化していることが背景にある。そして劉会員は、中国のメディア環境が激変し、オンライン／オフライン、伝統メディア／ネットメディア、映像／実体、都市／農村などの境界線が溶けていくなかで、それともなう「変化」と「不変」を的確に捉えていくことが重要であると結論づけた。

休憩を挟んで、討論者の伊藤昌亮会員によって、(1) BBS から SNS への移行ともなう対抗的公共圏の構造転換、(2) 集合知と集合行動、(3) メディア研究の再構築、(4) 境界線と周縁部の再構成、という四つの視角にもとづく論点整理がなされ、参加者を交えた活発な討論がおこなわれた（参加者にはあらかじめ、問題提起者に対するコメントを付箋に記入してもらい、それを司会者が分類したうえで討論を進行した）。とりわけ参加者からは、中国のネットにおける規制が近年ますます強まっているなかで、コレクティブ・ジャーナリズムが健全に機能するための条件をめぐって、質問や意見

が相次いだ。その反面、中国語圏におけるメディア研究の課題と展望については、十分に議論を深める時間がとれなかった。したがって、研究会は盛会のうちに終了したが、いずれ改めて議論の場を設けることができると考えている。